

「人権を守る大きな努力」

相馬市立向陽中学校 3年 伊藤 彩

私の曾祖母は三年前に亡くなった。その頃日本ではコロナウイルス感染症が拡大していた。しかし、一度だけ家族で面会が可能となった。曾祖母が入院していたのは大部屋だったため、仕事で足を骨折した人、胃を悪くして入院した人、目の手術を受けた人など、年齢や性別、職業も様々で、普段あまり接することのない人たちと話す良い機会に恵まれた。世代や性別などが違っても、その人たちとの話はとてもおもしろかった。「人権」について考える時、その中の一人の患者さんのことが頭に浮かんだ。

今まで私は、人権侵害とは、障害者やお年寄りなど、立場の弱い人たちに対する差別や悪意のある偏見からくるものだばかり思っていた。しかしそれだけではなく、私たちの善意な行動や発言からも人権侵害がされているとその時知った。

その人は、がんの手術を受けた女性だった。年齢も曾祖母と同じだったため、よく曾祖母の話相手になってくれていたそうだった。この時のその人の言葉がとても印象に残っている。体が他の人より弱いことで、周りの人たちがとてもよくしてくれるのはいいが、そのために困ったり悲しい思いをすることもあるということだった。小さい頃から今まで、人に優しくしたり、親切にしたりすることは当たり前のことだと思っていたのでとても驚いた。また、自分の親切心というものが相手を傷つけてしまっているのかもしれないということにショックを受けた。親切心に対して困るとは、どういうことなのだろう。私たちの行動が迷惑だということなのだろうか。

私の身近な人に聞いても、高齢の方や病気の方、小さい子供などを中心的に優しく接してあげるのは当然のことだと言っていた。ところがその女性は、相手がたとえ好意でしている行動だとしても、子供でもないのに、子供のように扱われてしまうことが嫌なのだそうだった。また、自分でやってみたいことがある時も、周囲の人が「おばあちゃんはやらなくていいよ」と自分に対して一言いい、やられてしまうのが悲しいそうだった。

私ははっと気がついた。今まで声をかけてあげる側の気持ちだけで考えていたが、かけられる側の気持ちを考えていなかったため衝撃を受けた。いつの間にか、自分の自己満足になっているのではないだろうか。私は習い事で、自分より

小さい子と関わる時がある。その時に、自分より小さい子から指図されたりすると腹が立つ。この女性の思いと自分の似たような経験はないか考えたと同時に、女性のつらさというものが全てではないが、分かってあげられた気がした。確かに、弱い人や困っている人を助けてあげるのは良いことだと思う。しかし、相手が望んでいないことを自分の考えで一方的に押し付けるのは、親切心でも善意でもなんでもない人間のただの自己満足だと強く思った。

人は皆、平等である。しかし、生まれ育った環境や体力などは同じではない。だからこそ、手を差し伸べる自分の考えで行動するのではなく、相手の気持ちを尊重した行動や発言をしていく必要があると思う。「人権」というものは、どこか遠くに感じるようで意外と自分の近くに存在する。人権について考えていくのは人間であり、それを持っているのも人間だ。自分も相手も一人の人間として、自分だけの意見だけで終始行動するのではなく、相手の心に寄り添い、理解し合う努力こそ人権を守る大きな努力になると思う。これを忘れずに生きていきたい。